

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531100

研究課題名(和文)植民地期朝鮮における歴史教育の実態に関する研究

研究課題名(英文)Study on Historical Education in Colonial Korea

研究代表者

國分 麻里(KOKUBU, Mari)

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：10566003

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：植民地期の歴史教育に関する先行研究は、朝鮮総督府の政策や歴史教科書の分析が中心であったのに対して、本研究では地方の教育の実態から歴史教育の実践について明らかにした。ソウルだけでなく、全羅北道群山や忠清北道清州、京畿道楊平での地域調査の結果から、郷土教育や学校誌からみる教育や歴史教育の状況を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The most of previous studies has focused on policy of the Government-general of Chosen and analysis of history textbooks. In contrast, this study took up the situation of historical education in local areas, such as Seoul, Gunsan in Chungcheongmam-do, Cheongju in Chungcheongbuk-do, and Yangpyeong in Gyeonggi-do. From Gakkousyuu gathered through the field survey in Korea, it clarified the situation of historical education as the local education.

研究分野：社会科教育

キーワード：歴史教育 地域 植民地期朝鮮 学校 児童生徒 国史教科書 朝鮮総督府

1. 研究開始当初の背景

植民地期朝鮮の歴史教育に関する先行研究は、朝鮮総督府の教育政策や歴史教科書の内容分析が中心であった。筆者もこれまで植民地期朝鮮の普通学校における歴史教育を朝鮮事歴(朝鮮歴史)という視点から明らかにしてきた。しかし、これらの研究は朝鮮総督府の教育政策を明らかにしたものの、その具体的な実態は明確にしていなかった。

2. 研究の目的

本研究では、植民地期朝鮮における歴史教育の実態を当時の資料から明らかにすることを目的とする。本研究ではソウルや地方の歴史教育の実態を主に初等学校段階を中心に明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は基本的に文献研究である。ソウルでは朝鮮総督府図書館の蔵書を所蔵している韓国中央図書館や国立国会図書館を中心に資料収集を行なう。地方では、全羅北道群山市や忠清北道清州、京畿道楊平での地域調査を行う。また、各学校が保管している植民地期の教育および歴史教育に関する資料を調査する。これらの資料調査から、歴史教育の実態について明らかにする。また、植民地期に生徒であった者の歴史ノートの収集、教師であった者への授業ノートや教材なども収集対象とする。その際、機会があれば植民地期に教師や生徒であった者への聞き取り予備調査も行う。

4. 研究成果

3年間の研究成果を、韓国および日本での資料調査・収集活動、研究成果報告の順番で記す。

(1)韓国での資料収集活動を示すと以下の通りである。

表1：3年間の韓国および日本での資料調査・収集活動

年度	韓国での資料調査・収集活動
2012年度	韓国全羅北道群山市での資料調査 ・群山市立図書館 ・群山市立図書館 韓国ソウル市での資料調査 ・韓国国立中央図書館 ・韓国国会図書館 日本での資料調査
2013年度	韓国忠清北道清州での舟城初等学校での資料調査 ・舟城教育博物館 ・清州市立図書館 ・清州教育大学校図書館 ・忠北大学校図書館 ・韓国教員大学校図書館 韓国ソウル市での資料調査 ・韓国国立中央図書館

	・韓国国会図書館 日本での資料調査
2014年度	京畿道楊平郡での資料調査 ・楊平初等学校の訪問 ・楊平郡立図書館 韓国ソウル市での資料調査 ・韓国国立中央図書館 ・韓国国会図書館 日本での資料調査

表1のように、2012年度～2014年度の3年間で、朝鮮総督府関連の資料があるソウルと地方での資料調査を行った。ソウルでは主に植民地期に朝鮮総督府図書館に蔵書されていた本類が現在所蔵されている国立中央図書館と日本の国会図書館に当たる国立国会図書館での資料調査を行った。地方調査では3年間で3カ所(群山・清州・楊平)の資料調査を行なったが、その地方調査の概要は以下の通りである。

1年目は、韓国の南西部にある全羅北道群山市での資料調査を行った。ここでは、植民地期に日本人生徒が通った群山小学校の教育と郷土教育に関する史料収集を行なうとともに、歴史教育に関する史料収集を行なった。群山市立図書館や群山大学校図書館において、群山小学校の教育状況や郷土教育に関する資料を入手し、植民地期の日本人生徒に関する教育を明らかにできたことは大きな成果であった。だが、群山における植民地期の歴史教育そのものに関する資料はほとんど入手することはできなかった。

2年目は、韓国忠清北道清州市での舟城初等学校での資料調査を中心に行った。舟城初等学校を訪問し、学校内にある舟城教育博物館を見学した。この博物館の建物は植民地期に講堂として使われていたもので、現在は舟城初等学校に残っていた植民地期の教科書や教育道具などが保存されている。植民地期に児童であった卒業生も来て下さり、当時の教育や歴史教育に関する話をお聞きした。これ以外にも、清州市立図書館、清州教育大学校図書館、忠北大学校図書館、韓国教員大学校図書館で植民地期の教育および歴史教育に関する史料収集を行なった。

3年目は、京畿道楊平郡での資料調査を中心に行った。楊平初等学校の訪問を行い、植民地期の学校資料の有無を調査した。当時の学校長が楊平初等学校の卒業生で、現在も学校の校区内に住んでいる。そのため、学校所蔵の資料について説明を受けながら、楊平初等学校の歴史についての話を聞いた。また、楊平郡立図書館でも植民地期の教育に関する資料を収集した。

以上が、3年間の韓国での資料調査・収集活動である。

(2)研究成果報告

これら3年間の成果を挙げると、以下の3点となる。

1 点目は、韓国の都市である群山の植民地期の教育および郷土教育に関する歴史教育について明確にすることができたことである。植民地期の群山は「米の群山」として産米増殖計画以降はその広大な湖南平野を背景にして米の集積地として機能し、日本へコメを送り栄えた土地である。植民地期に日本人児童が通った群山小学校の資料を入手し、1930年代前半の教育および郷土教育に係る歴史教育を明らかにした。具体的には、地理教育とともに郷土教育の中心的内容となる歴史教育について、その地域の状況に即した具体的な学習内容を明らかにした。

2 点目は、韓国の各地域で植民地期の歴史教育に関する資料収集を行なったことである。韓国も植民地期から 70 年が過ぎて植民地期の経験者が少なくなっていく中で、各学校での植民地期の資料収集の状況を把握することは必要となっている。本研究では、特に忠清北道清州市の舟城初等学校の植民地期の学校資料類、京畿道楊平初等学校の植民地期の学校資料類を学校訪問により調査・収集した。特に舟城初等学校では、植民地期の学校資料を見学するとともに、植民地期に児童であった 1 名の卒業生にも話を聞いた。その方は国民学校 2 年生の時に日本からの解放を迎えたのであるが、朝鮮人の先生方に良くしてもらったこと、音楽を通じて民族心の育成がなされたことを話してくれた。しかし、歴史教育は当時 5・6 年生で学ぶために、歴史教育に関する話は聞くことができなかった。

3 点目は、各学校の植民地期の教育資料となる各学校の『100 年史』の資料を分析し、その一部に歴史教育の実態を示す叙述があることを確認したことである。具体的には、『木浦北橋 100 年史』(1990)、『校洞 100 年史』(1994)、『稷山初等百年史』(1999)、『地域社会と一緒に果川初等学校 100 年史の成果』(2013)、『玉果初等学校 100 年史』(2010) などである。あまり多くはないものの、これらの資料の中で卒業生の「回想録」などから歴史教育に関する部分を抜粋した。また、『100 年史』の中の内容比較が比較的容易な幾つかの歴史的事項を一部分析し、その実例を学会において報告した。

以上のように、本研究では植民地期の教育に関して大きく 3 つの成果を挙げることができた。しかし、本研究の当初の目的であった歴史教育の実態に関する資料は、3 年間で断片的な記述を見つけただけにとどまった。そのため、植民地期の歴史教育の実態については、学会発表や論文作成にあまり繋げることができなかったことは残念なことである。今回の 3 年間で何度にもわたる韓国調査の中で、植民地期の歴史教育に対する実態を把握することが難しかった理由として、朝鮮総督府関係資料以外に、教育雑誌や新聞など公の資料の中にその関連資料がほぼ存在しなかったことが最も大きな理由として挙げら

れよう。また、当初予定していた植民地期に生徒であった者への歴史ノート収集、教師であった者への授業ノートや教材なども収集を試みたが、全く見つからなかった。

現在の韓国でこうした植民地期の歴史教育に関する資料収集が困難であることの原因として、次の 3 つを指摘することができよう。1 つ目は、1950 年に勃発した朝鮮戦争により多くの学校資料が紛失・散在したということである。朝鮮戦争によって現在の韓国の地域では大邱と釜山、済州島以外は戦火に巻き込まれた。その際に、植民地期の学校資料が紛失・散在したのである。このことは、資料調査で各学校を訪問した際にも責任者から聞かされた話であった。2 つ目は、植民地期が始まる 1910 年の韓国併合から 100 年以上が過ぎ、この間に学校の建て替えが進み、学校関係の史料は永久保存の学籍簿を除いてほとんど残存していないということである。3 つ目は、植民地期における歴史教育の特殊性を挙げることができる。朝鮮総督府が皇国市民育成のために重視した教科が国語や修身、歴史であった。そのために、歴史教育の実践は多くの規制の中で行われ、多様な実態は資料などを通して表面に出にくいことが推測される。これら 1 つ目と 2 つ目については、歴史教育に限らず、植民地期の資料収集全般に当てはまる話である。さらに、植民地期に教師や生徒であった者への聞き取り予備調査も数名実施したが、植民地からの「解放」からすでに 70 年もの時間が過ぎていることから記憶がかなり曖昧であり、予備調査とは言え、裏付けがある資料となるようなものはほとんど出なかったことも残念なことであった。

以上のことから、今後の植民地期朝鮮に関する資料調査は、資料が存在している可能性がある大邱や釜山、済州島で歴史教育の実態に関する資料調査を行う必要がある。できる限り体系的な記述ができるように、今後も引き続き植民地期の教育や歴史教育についての資料調査を続ける予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

{学会発表}(計 1 件)

國分麻里、韓国の学校 100 年史における植民地期朝鮮の教育 - 内容の分析を中心に - , アジア教育学会第 9 回大会, 埼玉工業大学, 埼玉県深谷市, 2014.11.1

{図書}(計 1 件)

國分麻里、植民地下朝鮮の群山小学校における郷土教育 - 1930 年前後を中心に - , 『アジア教育史学の開拓』, 編者古垣光一, 東洋出版, 2013, 303 - 332

6. 研究組織

(1)研究代表者
國分 麻里 (KOKUBU, Mari)
筑波大学人間系・准教授
研究者番号 : 10566003